

[投稿: 研究論文]

分離から「多元的なもつれ」へ

ファッションの实在論、そしてファッション人類学に向けて

From Dissociation to Plural Entanglement

Towards Realism and the Anthropology of Fashion

龍花 (小野瀬) 慶子

慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科後期博士課程

明治大学商学部特任講師

Keiko Onose Tatsuhana

Doctoral Program, Graduate School of Media and Governance, Keio University

Senior Assistant Professor, School of Commerce, Meiji University

Correspondence to: keiko-onose-t@keio.jp

Abstract: 本稿は、ファッションを論じる新たな枠組みである「ファッション人類学」を素描することを目的とする。その枠組みとは、「つくる実践」に焦点を当て、人々がいかに物事に取り組むのかを「フラットな関係論的存在論」から捉え直すものである。このアプローチは、従来のファッション理論における意味と物質をはじめとする数多の分離と二元論を乗り越え、物質と非物質、主体と客体、人間と非人間、過去 / 現在 / 未来が分離されない「多元的なもつれ」の領域を明らかにし、ファッションを、リアリティを生成する運動体として再構成する。

This study outlines a new framework for theorizing fashion, which I call ‘an anthropology of fashion’. Grounded in the ‘practices of making’ and informed by a ‘flat relational ontology’, this framework reconsiders how people work with things beyond the numerous dissociations and dualisms—including those of meaning and matter—found in conventional fashion theory. It reveals a field of ‘plural entanglements’ where the material and immaterial; human and nonhuman; and temporal dimensions—past, present, and future—are inseparably interwoven, allowing fashion’s reconfiguration as a dynamic entity making realities.

Keywords: ファッション人類学、实在論、つくる実践、多元的なもつれ
anthropology of fashion, realism, practice of making, plural entanglement

1. はじめに

ファッションは、人間と物質、非物質も含めた、多元的アクター間の関係が生成変化することで新たなリアリティをうみだす運動体である。それは、現実世界の他の事象同様、社会的、技術的、感覚的、そして人間の生の次元、さらには、自然環境や地球のような人間の生とは異なる時間の次元をも含み込む。業界の慣習、倫理、地域コミュニティ、グローバルな市場のような、生産から受容の基盤を提供する広範囲な制度や、伝統、技術のような過去の社会活動の産物、共有される感情や感覚、人々の日常生活や人生、自然環境などが全方向的にもつれ合いファッションを構成する。この「多元的」で「全方向」へのもつれ合いは組み替えられ続け、人間を含む運動に参加するアクターは互いを

共 - 構成し合い自己変容を続ける。ゆえに、ファッションは切り分けられない。

ファッションをこの世界に存在させるのは私たちの「つくる実践」である。この実践は、衣服などを商品として企画・生産・販売する活動にとどまらない。着る行為も「もつれ」に参加する。さらに述べると、衣服と人間の相互作用にもとどまらない。従前の限定的な理解から拡張された「つくる実践」である。それは、デザイナーのアトリエ内のような親密な協働関係から、分業やコラボレーション、あるいは未来に起こり得る潜在的な関係、感覚を共有する抽象的な集団まで、多様な社会的形態を生み出す。新たに産出された社会的形態は、既存のものと交渉し、それを屈折させ、新たなリアリティ、新たな現実世界を創り出す。

この意味において、ファッションを「つくる実践」はゆたかな創造行為であり、パワーを持つのである。

本稿におけるこれらの主張は、山形県山辺町を拠点とするニットメーカー／工場の米富繊維株式会社と、京都西陣地区を拠点とする西陣織メーカーである株式会社細尾にて、筆者が実施したフィールドワークとライフストーリーインタビュー、さらに、買うや着る行為も含めた、多様な異なる立場で「つくる」プロセスに参加する人々へのインタビューと活動するフィールドへの訪問から多くの着想を得ている¹⁾。くわえて、「つくる実践」を生業としてファッション産業の社会的世界に身を置いてきた筆者のアクチュアルな経験を多く活用している²⁾。

しかしながら、筆者が調査のフィールドにおいて、あるいは自身の経験から実感する、ファッションを「つくる実践」がいかに多様な社会的形態を生み出し、新たなリアリティ、新たな現実世界を創り出すのか、そしてこの運動体がいかに参加する人々に経験されるのかについて説明をする上で、ファッションを理解する知の前提にある、従前の二元論的、還元的、かつ外側から捉える認識論的方法是、有効に機能し得ない。

このような主張と問題意識に立ち、ファッションを論じる新たな枠組み「ファッション人類学」を素描することが本稿の目的である。新たな研究枠組みを考察するにあたり、まず本稿は、「関係論的存在論」(Strathern, 1988; ラトゥール, 2019; バラッド, 2023)がいかにリアリティとその生成を再定義したのかを確認する。その後、「関係論的存在論」やアクターネットワーク理論(ANT)の知見を芸術や文化生産に適用し、音楽をめぐる存在論の変化を理論化してきた、アントワヌ・エニヨン(Antoinne Hennion)やジョージナ・ボーン(Georgina Born)に代表される「音楽的アッサンブラージュ」(Hennion, 2003; Born, 2005 など)と「細尾のセヴェンヌ」の事例を取り上げ、「多元的なもつれ」としてファッションを捉える新しいアプローチを論じる。

筆者が「音楽的アッサンブラージュ」に着目する理由は以下の二点である。第一は、人類学や科学技術論における議論を取り入れながら二元論や還元論を回避し、音楽という文化・芸術を、非物質や制度、時間の次元を含めた広範囲な「媒介」へと発展させた学術上の貢献にある。第二は、エニヨンやボーンより遡ることになるが、客体化されたモノとして音楽を論じる音楽学から、人間の行動としての音楽人類学へ(メリアム, 1980)、さらに人間と人間(スモール, 2011)、人間とモノ(佐本, 2021)へと音楽実践における相互作用を拡張し、音楽の存在論を発展させてきたその軌跡は、ファッションを論じる視座を考察する上で多くの示唆を持つ。これらを援用することで、「多元的なもつれ」か

ら新たなリアリティをうみだす運動体としてファッションを再構成し、ファッションの新たな「実在論」を議論し得る理論的基盤を提供することを目標としている。この試みは、ファッションが他の文化・社会的現象における主要な議論の潮流から乖離し、特殊な領域として例外的に取り扱われる傾向を克服することを含意する。

本稿における問いは、必然的に、従前の「ファッションとは何か」や「ファッションが何を反映しているのか」から、以下の三点へと変換される。第一は、ファッションのリアリティはいかに生み出されるのかについてである。「つくる実践」において、いかに人々が物事に取り組むのか、その様態を捉えるのである。第二は、生み出された新たな社会的関係や、新たな形態の「つくる実践」が、いかに現実世界を再構成するのかについてである。第三は、これらを通して、参加するアクターが自己変容する生のプロセスへ、ファッションを「つくる実践」がいかに働きかけるのかについてである。

まず、本稿は、ファッション産業の現状を取り上げ、ファッションを捉える異なる枠組みの必要性について述べることから始める。

2. ファッションの現状

消費主義・資本主義的ファッションの限界

ファッション産業は、テクノロジーの発展による情報化を味方につけながら、ファッションを、消費を刺激し短期的な経済利益を生み出す物語へと作り変えてきた。この物語によって、生産は消費の従であり受動的なもの(エントウイスル, 2005)として捉えられ、「つくる実践」において、人々がどのように物事に取り組むのかは見えにくくなった。対照的に、ファッションにおいて広く表象されてきたのは、着る主体である人々の需要と欲望を反映する身体と、客体化されたスターデザイナーや商品イメージの断片である。

これらの背後にある、対象を客体化する近代的な知は、経済成長と資本の蓄積を加速させる物語の中で「経済的理性の狂気」(ハーヴェイ, 2019)へとなってきた。近代的な知による客体化は産業構造の中に埋め込まれ、人間や自然を物として合理的に扱い管理・統制してきた。ファッション産業における加速は、社会問題として顕在化している安価な大手小売チェーンによる大量生産・大量販売や、縫製工場への劣悪な取引・労働条件にとどまらない。合理的な範囲を超えた値引き要請や、契約を順守しない投資家、すぐに取り替えられるデザイナー³⁾など、社会的不公正は至るところで、日常的に起こっている。

環境危機が要求するファッションの変革

このようなファッションの大きな物語の渦中で、ファッションは、環境破壊の問題を筆頭に、無制限の消費と貨幣的価値としての利益創出を原則とする社会がもたらす限界と問題に直面している。誰もがソーシャル・ネットワーキング・サービスやウェブ上で情報を発信することが可能になり、民主化された情報のネットワークは消費を刺激するツールとして働く反面、環境破壊の問題や社会的公正等の問題を可視化することを促進した。その結果、見えるようになったこれらの問題に人々は敏感に応答し、ファッションアイテムの購入をボイコットする運動や、サステイナブルな生産／消費の循環を構築するための活動が行われている。このように、人々が、無限の消費を前提とした社会の限界を認識することにより、消費を刺激し短期的な経済的利益を生み出す物語であるファッションは、変革の要求に直面している。

The End of Fashion—ファッションへのオルタナティブなアプローチの必要性

それではどのようにすれば変革の要求に応答することができるのだろうか。求められるのは、現在とは異なるファッションの姿を描く想像力と、現在のファッションのリアリティは固定的ではなく、変化し得ることを説明できる生成的な理論だろう。

2018年に刊行された *The End of Fashion* と題された論集 (Geczy and Karaminas eds., 2018) の序において、編者であるアダム・ゲーチとヴィッキー・カラミナスは、哲学者スラヴォイ・ジジエク (Slavoj Žižek) による「エンド・タイムス」(ジジエク, 2012) の議論を援用し、それと対比しながら現在のファッションの苦境を指摘している。20世紀における「エンド・タイムス」の苦境は、それでも、「左派は何をすべきかを知っていると考え、それを実行する適切な機会を待つだけでよかった」。それに対して、現在のファッションは、「私たちは何をしなければならないのかわからない。しかし、それにもかかわらず、何かをしなければならないことは分かっている」というさらなる苦境に陥っているのである。

「ファッションじゃない服」⁴⁾ という言説や、*The End of Fashion* のような議論が広がり、ファッションは終わりの感覚に覆われている。何かをしなければならないのはわかっているが、何をしなければならないのかわからない現在において、ファッションは絶望なのだろうか。筆者は、決してそうではないと考える。ゲーチとカラミナスは、アーサー・ダントー (Arthur Danto) の「芸術の終焉のあと」(ダントー, 2017) に倣い、*The End of Fashion* は文字通りに

捉えられるべきものではなく、終わりに向かっているのは、むしろ 19 世紀と 20 世紀において私たちが理解してきたようなファッションとファッション・システムのあり方であるとする (Geczy and Karaminas eds., 2018)。彼らが終わりに向かっている、あるいは終わりに向かうべきものとして指摘するのは、これまで支配的であった西洋を中心とする一方の概念群に還元された、消費主義的・資本主義的なファッション・システムであろう。

しかしながら、終わりに向かうのは、ファッション産業のシステムだけではない。ゲーチとカラミナスがいみじくも「私たちが理解してきたような」と述べるように、ファッションを理解するための枠組みも異なるものが必要なのである。しかし、私たちがこれまでファッションを理解してきた埋め込まれた知の前提や枠組みを引き継いでいては、別のファッションの可能性を想像することさえできないだろう。埋め込まれた知の前提を問題化し、ファッションを理解する別の枠組みへと転換していくことが必要なのである。

3. ファッション理論における多重の分離

ファッションの歪んだリアリティ

それでは、私たちはどのようにファッションを理解してきたのだろうか。ファッション理論は長らく、ファッションから日常的実践を切り離し、ファッションを資本主義・消費主義的なシステムとして取り扱ってきた。日常的実践という現実世界から切り離されたファッションは、意味と物質⁵⁾、商品とつくり手の生、合理性と創造性、西洋と非西洋、グローバルとローカル、近代と前近代、そして、消費と生産などのように二元論的に捉えられ、ファッションに関連する多くの概念は分離してしまった。

その結果、ファッションは、西洋、近代、グローバル、システム、意味、商品、消費などの分離した一方の概念に還元され、無限のハイパーリアル (ボードリヤール, 1984) な時空間に浮遊する記号として、あるいは儚い (Lipovetsky, 1994) ものとして論じられてきた。他方、ファッションにおいて不可欠な構成要素であるはずの、物質、自然環境、つくり手の生、非西洋、ローカル、前近代、生産は、一方の従となり後景に退いてきた。この偏ったファッション像は、消費社会の拡大とともに支配的で固定的なものとなり、ファッションを歪んだ現実として見せてきた。

こぼれ落ちた「つくる実践」

1990 年代以降、ファッション研究者たちは、着る主体の経験と身体概念を用いて、ファッションに関する理論を、衣服を纏う実践と結びつけてきた (鷺田, 1998; エントウィスル, 2005)。これによって、研究の視点は「着る

人たちや衣服を介してなされる相互行為」(工藤, 2021)、つまり「着る実践」へと広がり発展してきた。「着る実践」への着目は、着る主体のアイデンティティ構築や日常的な「着る実践」を照射し、浮遊する記号として論じられリアリティを消失してきたファッションに、「着る」側面からリアリティを回復させたのである。

その一方で、研究者たちは、人々の日常的な営みとしての「つくる実践」には注意を向けてこなかった。「つくる」と「着る」をめぐる議論は非対称に発展してきたのである。「つくる」は、生産として、主に経済理論やマーケティング、産業史の分野で取り扱われ(エントウィスル, 2005)、これらの領域における生産をめぐる議論は、いかに消費を促進し経済価値を生み出すか、あるいは製造工程そのものを論じるものであった。「つくる」人々の経験やその内実はブラックボックス化され、その代わりに「つくる実践」は、自律したクリエイティビティによって作品を生み出す神話化されたデザイナーと、その作品に還元され論じられてきた⁶⁾。このようにして、生産と「つくる実践」は分離し、「つくる実践」は研究者の関心からこぼれ落ちてきた。本稿は、物事の根本的な連続性を見えにくくするものとして非対称性を問題化し、次章にて「フラットな存在論」(Born and Barry, 2018)を援用しながらこの問題を検討する。

人類学におけるファッションと「ファッションのようなもの」の分離

それでは、人間の営みに焦点を当ててきた人類学において、ファッションはどのように議論されてきたのであろうか。残念なことに、人類学者たちはファッションそれ自体を研究対象として取り扱ってこなかった。その一方で、身体装飾 adornment、衣服 dress、布 fabric、手工芸 handcraft などの、ファッションに関連づけられる、あるいはファッションの同義語と考えられつつも、厳密にはファッションとは異なるこれらの「ファッションのようなもの」にまつわる人間の営みを民族誌として厚く記述してきた。文化の多様性に立脚しながら他者を研究対象とする人類学者の大多数にとって、「西洋近代に見られる衣服のシステム」(エントウィスル, 2005)や、「資本主義の申し子」(Sombart, 2001)として論じられてきたファッションは、真剣に取り上げるべきテーマではなかった。テッド・ポレムス(Ted Polhemus)⁷⁾は、1970年当時の人類学におけるファッションへの関心の低さに対する失望を述べている(Polhemus, 2012)。このようにして、長らく人類学においてファッションが取り扱われることは限定的であり、ファッションと「ファッションのようなもの」は分離されてきたのである。

モノをモノへ還元するという「物質化のプロセス」

人類学において、ファッションという概念と距離をとりながら、「ファッションのようなもの」を取り上げてきたのが物質文化研究である。ブレント・ルバース(Brent Luvaas)とジョアン・アイシャー(Joanne Eicher)は、その編著 *The Anthropology of Fashion and Dress: A Reader* の序において、衣服とファッションの人類学は領域として存在していないと述べている⁸⁾。彼らがその例外として挙げるのが、ダニエル・ミラー(Danielle Miller)らによる物質文化研究である(Luvaas and Eicher, 2019)。そのアプローチは、社会的関係や存在を構成する表象としての物質性と、その物質的特性が人々にどのような影響を与えるのかを探究するものであり(Küchler and Miller, 2005)、その問いは、「人々が物を使って何をするのか」についてであった(Miller, 1998)。

ミラーらによる物質文化研究に通底するこれらの問いに対して、正面から批判的な議論を展開してきたのがティム・インゴルド(Tim Ingold)である。インゴルドは、ミラーらのアプローチを「素材の流動やその変化が結晶化した後の世界から出発している」として、モノをモノへと還元する傾向に陥っていると批判した。このような批判の背景にあるのは、自然と文化の二元論や人間中心的な世界観への異議であった。インゴルドが主張したのは、最終的な産物ではなく生成のプロセスそれ自体を、また物質の状態ではなく素材の流動と遷移を第一の与件とする存在論であった。インゴルドが引用する画家パウル・クレーの言葉通り、インゴルドにとって「形とは死であり、形を与えることは生」なのである。インゴルドの存在論において、形式は、それを生み出したデザインに基づいて説明できるのではなく、他者や環境との相互作用を通じて生じるのである。そして、物質それ自体は「エージェンシー」を持たず、物質は共生的関係から成り立つ「生成される」プロセスとして位置付けられている。(Ingold, 2010; インゴルド, 2021)。

インゴルドのプロセス理論を援用しながら、ファッションを「物質化し変容するプロセス materialization」として論じたのが、ソフィー・ウッドワード(Sophie Woodward)とトム・フィッシャー(Tom Fisher)である。ウッドワードらは、「物質文化」から考えるより「物質化し変容するプロセス」としてファッションを考える方が有益であると述べ、モノそれ自体が、物質的あるいは社会的に変容することを前提に議論を進めている(Woodward and Fisher, 2014)。この議論においてウッドワードらが試みたのは、ファッションそのものは非物質であるという暗黙の前提や、ファッションの意味は衣服そのものに先行すると考える記号論的な議論を乗り越え、非物質なものを特権化する

表象からファッションを開放することであった。

しかしながら、「物質化し変容するプロセス」は、物質と非物質の二元論を克服するというよりは、むしろ、インゴルドの言葉のように、モノをモノへと還元する (Ingold, 2010) 傾向に陥っているようだ。彼らは、ファッションのアッサンブラージュとして、古い衣服と新しいアイテムを混ぜて着る行為を例示し、このアッサンブラージュにおいて、複数の歴史が集まり一時的なファッションの星座がつけられるとする。これは、インゴルドのプロセス理論への批判として挙げられる「単一の時間性しか認めていない」 (Born, 2015) 点の克服を意図としたものであろう。しかしながら、提示される以下の三つの時間性、(1) 流行の生、(2) ファッションナブルになる前と後の物質的な生、(3) モノがファッションナブルになったり、そうでなくなったりする動態は、ファッションが環境や他の事象を含む世界の生の流れから切り離され、流行とファッションナブルが支配する自律した時空間に閉じ込められてしまっているように思える。ファッションは、人間と衣服、流行だけではなく、生産から受容の基盤を提供するより広範囲な制度や、過去の社会活動の産物、さらに、自然などとの、より広範囲な関係のダイナミズムの中に位置付けられる必要があるのではないか。このようなファッションの複雑で広範囲にわたる関係のダイナミズムを論じるためには、ウッドワードらの「物質化のプロセス」という枠組みは不十分であると言わざるを得ない。

一方で、これらの議論は、人類学において、モノをどのように捉えるのかが、重要な問題の一つであり続けていることを示唆している。意味と物質の分離の問題は、人類学にとって重要な問題の一つであった。アミリア・ヘナレらがウィリアム・リヴァース (Rivers, 1917) の「人類学における関心の全体的な動きは、物理的・物質的なものから心理的・社会的なものへと向かうものである」という宣言を引用しながら指摘するように、人類学者はそのような区別を曖昧にしようと努力しながらも、結局は、その分離の間で双方を行き来することを繰り返してきた。物質性と文化の再統合を試みる研究者たちでさえ、人と物、物質と意味、表現と現実を先験的に区別することを前提とする理論的言語と格闘し続けている。再統合のために提示された「ハイブリディティ」 (ラトゥール, 2008) という概念と同様、再接続への原動力は、分離という前提の上に成り立っているのである (Henare et al., 2007)。

4. 「ファッション人類学」の枠組みの考察

しかしながら、本稿が試みるのは、「物質」と「非物質」のどちらかを選択するのではなく、どちらでもない立

場——ファッションは物質であり、かつ非物質である——からファッションを捉えることである。ファッションを現実化し、それに手触りをもたらすのは「物質」だけではない。それが「物質」あるいは「非物質」のどちらであるかに関わらず、ファッションを経験することは、手触りを感じるのと同等の実感を人々にもたらすのである。

このようなファッションの経験は、「ファッション」という概念のもとに行われる人々の実践によってつくられる。ゆえに、本研究は、「ファッション」の概念にこだわらず、「つくる実践」に焦点を当てることを通して、ファッションのリアリティ——実践によって、ファッションが現実化され、いかに経験されるのか——を描き出すための研究枠組みを創造していくことにこだわるのである。本稿が示唆を得た音楽の存在論が辿った軌跡のように、ファッションを名詞としてではなく、動詞として捉えるならば、そのラテン語の語源 *facere* は、「実行する」「つくる」⁹⁾ あるいは「形を与える」 (Jenss and Hofmann, 2019) を意味する。このことは、ファッションを理解するにあたり、「つくる実践」に焦点を当てる試みを後押ししてくれる。「つくる実践」に焦点を当て人々がそれにどのように取り組むのかを追いかけることで、ファッションは、冒頭で指摘した数多の分離とは異なる、物事を切り分けられない領域を照らし出し、二元論を無効化し得る力強い事象となり得るのである。ここにおいては、「つくる実践」をめぐる分離や限定的な理解は解除される。本稿は、このような議論をふまえた上で、分離不可能な領域として、ファッションのリアリティを探索する枠組みを考察していく。そのための土壌となるのが、「関係論的存在論」と「音楽的アッサンブラージュ」である。

4.1 関係論的存在論

分離からリアリティの生成へ

物質と非物質の二元論を乗り越え、関係性からリアリティの生成を論じたのがマリリン・ストラザーンであった。ストラザーンは、博物館学が行ってきた物自体を研究する物質文化研究と、社会／文化人類学による物の意味づけの研究を分離してきた分業体制を問題化した。そして、物質の意味を社会・文化的な文脈によって解明するやり方を、英語圏人類学におけるモダニズムの段階とし、芸術形態を焦点とする場合でさえ、「儀式」といった社会的プロセスによって可視化された結果としてそれを意味づけてきたことを指摘したのである (Strathern, 1990)。

ストラザーンにとって、リアリティの成り立ちは、形や質料のある物質それ自体、あるいは社会・文化的な意味やそのシステム、そのどちらでもなく、それらを生成させ変換させる関係性にあった。そこでは、人間とモノ、主体と

客体、物質と精神といった従来の二元論は退けられ、これらは固定されず、人間や主体も、モノや客体との相互変換の関係において出現するに過ぎない。つまり、実在は決して所与ではなく、特定の関係においてのみ成り立つ。ストラザーンは、リアリティとは関係の生成変化に等しいという「関係論的存在論」を示すことで、分離や分業を克服する方法を提示したのであった(Strathern, 1988; 春日, 2011)。

「多元的なもつれ」への拡張

「関係論的存在論」の潮流に連なりながら、関係の弧を、より広範囲な物質、時間、空間、因果律へと拡張したのがカレン・バラッド(Karen Barad)のエージェンシャル・リアリズムである。バラッドは、物理学者ニールス・ボーアの量子論を存在論の観点から精緻化した独自の存在論を提示した。本稿がエージェンシャル・リアリズムを取り上げる理由は、「内部作用 intra-action」の考え方を提示することによって、(1)問題となってきた分離という前提——思考する主体と空間を占める物質が独立して実在すると考える通常の実在論——を再定義し物質を再概念化した点、(2)物質的再構成と実践の関係について言及し、実践を、「もつれ entanglement」を「切断する装置」として説明を行った点、(3)「もつれ」の弧を量子から宇宙までへと拡張した点にある。

まず、バラッドによる「物質」の再概念化をみていく。バラッドは、物質の生成はそのエージェンシーを伴っており、物質自体が積極的に現実を形作る存在であるとする。バラッドの議論において、人間の身体を含むあらゆる物質は、変化せず、歴史もなく、文化によって意味が書き込まれる受動的な存在ではない。物質はその振る舞いや反応を通じて世界を共同で形成する力を持ち、その力は常に動的で生成的なものである。

物質をこのように捉えた上で、物理的に実在する「存在」は、あらかじめ確定した境界、性質、意味をもつ個物ではないとする。バラッドにとって物質は常にすでに他者に開かれており、より厳密には、惑星同士が互いの引力でもつれあい存在しているように、他者と「もつれ」合っているのである。

実在論の再定義へ

翻って、関係的存在論は、主体から独立した世界の表象を通して理解される現実を、関係によって生成される動体として理解する枠組みに置き換える。しかしながら、関係論的存在論者が全て、関係に先んじて存在するものはないことを明言しているわけではない。ここに、理論上の曖昧

さがある。関係論的存在論を理論的に徹底する、つまり、「実在 reality」は関係によって生成されるとするためには、「実在論」を同時に再定義することが要請される。

バラッドは、存在論 - 認識論 - 実在論を同時に再定義し、この問題を徹底させた。バラッドによれば、関係項が差異的に確定され現れるのは、その実質が「内部作用」し互いに「共 - 構成」することで、特定の存在へと再構成されるためであるとする。これまで現象を生み出す相関を言い表してきた「相互作用 inter-action」は、関係項があらかじめ存在しそれが関係を取り結ぶことを含意している。それに対し、バラッドは、世界は主体と対象が「相互作用」する場としてではなく、むしろそれらの区別自体が生成される「内部作用」の場として理解されるべきであると主張した。この「内部作用」という概念を用いることで、バラッドは、「実在」とは、あらかじめ存在する対象の集合ではなく、独立した現実の表象でもなく、世界の内部で、世界の一部として「内部作用」を通じて生成される実践的な結果であるという説明を可能にしている。このようにして、バラッドは、関係項はあらかじめ存在せず関係そのものから関係項が生み出されるとして関係論的存在論を徹底させ、同時に、「存在」の分離を前提とする従来の存在論を無効化したのである。

存在を産出する装置としての実践

本稿がバラッドの議論を取り上げる理由の二点目は、物質的再構成と実践の関係性を明確に提示したことである。ラトゥール(2007)も、人間の実践によってこの世界に存在するものがあるようになることを述べたが、バラッドは「切断」によって特定の現象が産出されるとし、「物質 - 言説的实践」を「もつれ」を局所的に解決する「切断」の装置と位置付けた。バラッドにとって装置とは単なる観察の道具ではなく、問題＝物質となる境界線を引く実践、すなわち、世界の特定の物質的再構成なのであり、装置それ自体が、世界で進行中の内部作用の一部として再編成される現象の一部なのである。

ここにおいて、存在論の基本単位は個別の物体ではなく現象であり、意味論の基本単位は言葉ではなく境界が制定される実践である。バラッドにとって現象は、人間主体によって設計された実験室実践の単なる結果ではなく、むしろ複数の物質 - 言説的实践の複雑な内部作用を通じて生み出される物質化の差異化パターンである。そして、この切断は永続的で絶対的なものではなく、異なる実践(装置)と切断が次々と実行され、世界を常に異なる生成の可能性に開く。

見えない次元

エージェンシャル・リアリズムにおいて、本稿が重要と考える第三の点は、装置(実践)を、私たちの目に見える範囲や人間の社会的領域に限定しないことである。バラッドにとって装置としての実践は、量子の次元から、引力によって互いに引き合うことで存在する惑星の次元までをその射程に含みこむ。くわえて、「内部作用」は、今後存在するようになるものと、今後可能になることの両方を再構成し、変化の可能性と変化の性質を変えるのである。つまり、装置(実践)によって、空間性だけではなく、時間性も再構成されるのである。装置(実践)は見えない次元まで含み込みながら、しかしあくまでも産出される現象や可能性は外在的なものではなく、私たちはその現象の内側に存在する。そして「宇宙の一部としての私たちが宇宙の内側から宇宙に出会う」のである(バラッド, 2023)。

4.2「音楽的アッサンブラージュ」を経由して、「関係論的存在論」とファッションを接合する

「関係論的存在論」とファッションを接合するための援軍が、エニオンやボーンに代表される「音楽的アッサンブラージュ」である。前節で取り上げた、ストラザーンはメラネシアの人工物を、バラッドは量子物理学、ラトゥールは科学技術を対象とした議論であり、理論的にはファッション研究から遠いように思われるだろう。ファッション研究においては、ファッションを文化と自然のハイブリッドな実践とし、ANTをファッションの制度や市場に適用する可能性の提示(エントウィスル, 2018)や、エージェンシャル・リアリズムを援用したファッションにおけるフェミニストセオリー構築の試み(Parkins, 2008)が行われている。しかし、筆者が指摘した二元論や分離の問題、あるいはファッションの存在論にまで根源的に踏み込んでおらず、またそれらを引き受けた議論がその後発展しているとは言いがたい。このような現状を踏まえて、本稿は、エニオンやボーンらが、「関係論的存在論」に依拠しながら音楽の存在論へと踏み込み、音楽を「音楽的アッサンブラージュ」として理論化してきた学術的蓄積を援用することで、「関係論的存在論」とファッションとの接合を試みていく。

媒介を可能にするフラットな存在論

エニオンやボーンらに代表される音楽社会・人類学は、ANTやジェルのアートネクスス論(Gell, 1998)と対話をしながら、媒介という概念を用いて、音楽を「アッサンブラージュ」として理論化してきた。音楽は、複雑でさらに広範囲な媒介の中に、またはそれを通して存在するのである(Born, 2005)。このような「音楽的アッサンブラージュ」

は、ラトゥールが主張してきた人間と非人間は対称に扱われるべきであり、それらは関係的に共存していると考える徹底的な「フラットな存在論」(Born and Barry, 2018)を基盤としている。ここから音楽実践を捉える視座が、主体と客体、物と意味、楽器、システム、言語、制度、知覚の枠の間を自由に移動し、音楽の分析において、根本的な連続性や、多重に媒介されると考える立場を可能にした。ここでいう媒介とは、単に間を取り持つのではなく、出来事・意味・感覚・価値が媒介の連鎖によって、生成・変容してゆく過程そのものを表す。このように「フラットな存在論」と媒介から音楽を考えることで、彼らは、社会的分析と作品そのものに関する美学的な分析の分離のような二元論や、自律的な天才の個人とその作品に焦点を当てた本質主義的観念論、技術や社会構造など外在的な決定要因の反映として取り扱う還元主義を克服してきた(Born, 2005; Hennion, 2015)。

このような物事を対称的に扱う「フラットな存在論」からファッションを捉えることで、これまで本稿が問題としてきた物質と非物質、「つくる」と生産、「つくる」と「着る」のような多数かつ多重の分離を解消し、前提とされてきた枠や理解の限定を超えて、媒介、内部作用し合うと考えることを可能にし、根本的な連続性が保たれるようになる。

複数の時間性

「音楽的アッサンブラージュ」を、さらに広範囲な媒介へと拡張したのがジョージナ・ボーンである。ボーンは、音楽を、非物質でありながら物質的であり、流動的な準物体であると定義する。ボーンの主張の力点は、音楽における社会的、技術的、時間的次元の理解を組み込んだアプローチにある(Born, 2005)。

ボーンの主張において筆者が特に重要だと捉えるのは、「複数の時間性」¹⁰⁾についてである。ボーンは、アルフレッド・ジェル(Gell, 1998)¹¹⁾や、アメリカの政治学者であるウィリアム・コノリー(Connolly, 2011)を引用しながら、音楽における時間の概念は、通常扱われているより、より大きな時間的弧を包含しているとする。彼女が主張するのは、媒介は、人間が持つ時間の次元にとどまらないという点である。ゆえに、音楽の媒介を分析する上で、ミクロな社会的相互作用の領域に焦点を当てるだけでなく、音楽の集合体の歴史的軌跡を辿り、より長期的な物質的軌跡や、芸術・文化的対象も含む非人間的な世界による時間の生成を加味する必要があるとする(Born, 2015)。このような非人間的な世界とより長い弧を描く時間性への関心は、前述のバラッドの主張との興味深い共通点である。

バラッドやボーンが主張する、より長い弧を描く非人間

的な時間を組み込み、ファッションの時間を複数化する視座は、「ある特定の習慣の瞬間的なもの」や「儚いもの」の支配からファッションを解放することを含意する。ここでファッションは、前述した「ある特定の習慣の瞬間的なもの」や「儚いもの」として広く定義されてきたことを思い出してほしい。「複数の時間性」を視野に入れることで、瞬間だけではない、生活、人生、さらには非人間的な異なる時間の「もつれ」を照射しうるのである。

「複数の時間性」に関して、筆者のフィールドワークから一つ具体例をあげたい。西陣織メーカーである細尾が取り組んでいるセヴェンヌと呼ばれる絹糸復刻プロジェクトについてである。セヴェンヌの蚕種は、1903年にフランスから日本に持ち帰られたフランス種であるとされていた。ところが、最近のゲノム解析の結果、セヴェンヌは日本種であることが明らかになった。この解明により、現在では、セヴェンヌは1854年に発生した微粒子病により破壊的なダメージをおったフランスの養蚕業を復活させるために、日本からフランスへ輸出された蚕品種の一つだったと考えられている(井高, 2023)。現在、蚕種セヴェンヌは、約170年の時を経て再び日本に持ち帰られ、より軽くふわりとした膨らみを持つこれまでとは異なる新しい着心地を実現するアクターとして、今再びファッションの運動体に参加するのである。

未来への潜在的な可能性

ファッションを「つくる実践」を構成するのは、今、私たちの現前にあるものだけではない。ポーンが音楽的对象について示唆したように、ファッションは、人間的時間を解き放ち、過去と未来を流動的に創造すると考え得る。発明は眠っていても、数年後、数十年後、あるいは数世紀後に「時空を超えた表面化」、「年代的な時間の折り重なり」(Nagel, 2012)によって現実化し、さらには、「その方向性をとらなかったことが、後に、潜在的な可能性を秘めた萌芽として機能する」(Connolly, 2011)可能性を持つ。コノリーは、二つ以上の時間層の出会いが、一つの時間層における自己組織化の新たな能力を引き起こし、外圧やそれまでの組織形態、あるいはそれらの単純な組み合わせを超える方向へとつき動かす可能性があることを示唆している。コノリーは、このような複数の運動が複雑に絡み合い、それぞれが多様な可能性、特定のリズム、速度、変化のカーブを示すことで、最終的に歴史として堆積するような創発的な効果が生み出されると述べている。細尾のセヴェンヌ復刻プロジェクトのように、一旦、「もつれ」から排除されたものが、すぐに、あるいは100年後に、あるいはさらに長い時を経て、新たな「つくる実践」によって、異な

る「もつれ」へと再び組み込まれていくこともある。このように、ファッションの運動に参加するアクターは、次の、あるいは未来の現実へと変貌していく潜在性を持つのである。この意味において、ファッションは「未来への潜在的な可能性」を含みこむ「準物体」(ラトゥール, 2008; Born, 2005)なのである。

4.3 分離されない領域

本稿はここまで、「音楽的アッサンブラージュ」を援用しながら、ファッションと「関係論的存在論」の接合を試み、ファッションの存在に関する新たな理解を提起することを試みてきた。それを可能にする枠組みとして本稿が提示したのは以下の三点についてであった。第一は、ファッションを、「生成されるリアリティ」として捉える点である。これは、ファッションを解釈の対象として扱うファッション社会学や、デザイナーやその作品を取り扱うファッション史、さらには衣服という物質と人間の間を取り扱う物質文化研究とも異なった態度を示している。第二は、ファッションをこの世に存在させるのは「つくる実践」であり、それによって関係が生成され、関係項の性質が現れると考える点である。「つくる実践」は、人間も含む存在を生成・変容させるが、それは表面的な変化にとどまらない。「内部作用」を引き起こし、物質的再構成が行われることで、新たなファッションの事象が現れるのである。第三は、「つくる実践」が生成する関係の弧を、従前の「つくる」に関する理解や、私たちの目に見える範囲、そして人間の社会的領域に限定しない点である。冒頭で述べたように、多くの異なる立場で参与する人々、広範囲な制度、さらには、ファッションにおける集合体の歴史に加えて、自然や地球を含むより長期的な物質的軌跡や、非人間的な世界による時間の生成を加味する。

さて、このように関係の弧が拡張された「つくる実践」に焦点を当てた理論的枠組みは、どのような新しい知見をもたらすだろうか。それは、主体と客体、モノと概念、物質と非物質、人間と非人間、過去/現在/未来が分離されない「もつれ」合う領域を明らかにする。そして、この分離不可能な領域は、近代的な知が自明視してきた以下の三つの前提を揺るがし不安定化させる。

第一は、筆者が前述したファッションにおける多数・多重の分離についてである。細尾の実践によって今再び現前のもとなったセヴェンヌの存在が示唆するように、1854年にフランスで発生した微粒子病、日本からフランスへ、あるいはフランスから日本へ蚕種セヴェンヌを運んだ研究者や実業者たち、蚕を育てるために必要な十分量の新鮮な桑の葉、桑の葉を育てる豊かな土壌や自然環境、

現在に受け継がれてきた糸を操る手仕事技術と操糸機、それによって可能になる絹糸、未来に再現される全く異なる着心地を持つ着物や衣服、それらを未来へ繋ぐことを通して、大量生産・大量消費に軸足を置く現在の価値観に一石を投げようとする細尾の實踐が、復刻されたセヴェンヌの存在に刻み込まれている。つくる主体としての人間、意味が書き込まれ変形される受動的な素材、意味を宿す器としての衣服とそこに付加される意味、商品と作り手、過去と現在のような区分は有効性を失う。

第二は、ファッションを「つくる実践」が産出するものについての限定的な理解である。ファッションを「つくる実践」が産出するのは衣服だけではない。それによって生み出された新しい存在は、同時に、ファッションに影響を与える、技術あるいは社会的な合意事項や新たな価値観を含む多元的な関係項に作用を及ぼし、「多重」に、かつ「全方向」へと連鎖することによって、新たなリアリティをつくり出す。そして、この運動の内側にいる自己も、「内部作用」する関係項の一部となり共に創出される。すでに主体と客体の区分は無効化されているが、複数の作り手、複数の着用者、複数の関係項間のもつれ合いを通じて、ファッションは「共創されるリアリティ」の一部となり、社会的な合意事項や新たな価値観を生み出す基盤となる。

第三は、「創造」についての一元的な理解についてである。明らかになった分離不可能な領域は、「創造」を閉じられたものから、時間的、空間的、物質的に分散された、開かれたものへと転換する。これまで述べてきた主体と客体の区分の無効化は、従前のファッションにおける「創造」の概念を棄却し、「創造」について異なる理解をもたらす。ファッションにおいて、その「創造」は、デザイナーの創造性や感性、技術に還元され、デザイナー個人とその作品に価値を集約してきた。このような「創造」の概念は近代的な作者と結びつき、現在においても尚強い影響力を持つ。しかしながら、本稿で提示した細尾の事例が示す、複数の時間が出会うことによって単純な組み合わせを超える方向へと生成運動をつき動かす可能性は、「創造」を、一元的なものではなく、「多重」に「全方向的」に連鎖する「多元的なもつれ」と「内部作用」を通じた分散された運動として再構成するのである。

5. おわりに：分離から「多元的なもつれ」のファッション人類学へ

本稿は、まず、ファッションの現状を述べ、次に、ファッションがどのように議論されてきたのかを批判的に検討することを通して、物質と非物質の分離をはじめとする数多の分離と二元論を問題化し議論を進めてきた。次に、「関

係論的存在論」と、「音楽的アッサンブラージュ」を援用し、分離や二元論を回避しながら、ファッションを理解する異なる理論的枠組みを考察してきた。本稿が提示したのは、「つくる実践」に焦点を当てることを通して、ファッションを、リアリティを生成する運動体として理解するための枠組みであった。

これらの枠組みが明らかにしたのは、主体と客体、物質と非物質、過去／現在／未来を区別し得ない分離不可能な領域であった。この領域は、ファッションそれ自体をめぐる理解だけではなく、私たちが前提とするファッションを「つくる実践」に関する、そして「つくる実践」が産出するものに関する限定的な理解や、創造に関する一元的な理解を揺さぶり、それらを異なるものへと転換することを可能にする。

森田(2011)が述べるように、人類学の営みとは、フィールドワークと民族誌という方法を通して異なる生のあり方を描き出すことによって、現実化したものの背後にある潜在的な関係を探求し、われわれの概念を変形し拡張する試みであるとするならば、本稿におけるファッションの探求は、人類学における営みと共鳴する。概念化は、それ自体が対象を創造する。「異なる世界」を想像することは、それを創造することであり、それについて思考することなのである(Henare et al., 2017)。

このような探求の態度を本稿は「ファッション人類学」と名付ける。「ファッション人類学」の役割は、ファッションのリアリティについて論じていくための基盤を提供し、ファッションを「つくる実践」の事例を提示することによって、ファッションを理解するための新たな概念を創造し続けることである。

とはいえ、ファッション人類学は、まだ端緒についたばかりである。ファッションを「つくる実践」のフィールドへのアクセスは、二つの困難を抱えてきた。第一は、フィールドへのアクセスが機密保持などの要因により物理的に困難な点であり、第二は、「つくる実践」に焦点を当てる研究枠組みの不在が、取り組みを難しくしてきた点である。これらの困難を乗り越えて本稿が提示した研究枠組みを、現代におけるファッションを「つくる実践」に関する民族誌的研究へと展開し、これまで後景化されていた複数の異なるファッションのリアリティを提示することが今後の展望である。さらには多くの事例が蓄積され、本研究が提示した枠組みが検証され発展していくことが「ファッション人類学」における長期の課題である。ファッションを「つくる実践」同様、ファッション研究も常に異なる世界の生成に開かれている。

6. 謝辞

本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJS2123 および潮田基金による研究助成の成果の一部です。まず、本稿の執筆にあたってご指導いただいた指導教員の國枝孝弘先生に心より感謝を申し上げます。また、建設的かつ有益な助言を賜った匿名査読者の方々、調査にご協力をくださった方々に、この場を借りて深く感謝申し上げます。

注

- 1) フィールドワークの詳細については、別稿で提示したい。
- 2) 筆者が経験したファッションの社会的リアリティについては「フィッティングルーム：＜わたし＞とファッションの社会的世界」(小野瀬, 2023)を参照のこと。
- 3) WWDJAPAN『「短命化」が進んでいる？ 現代のクリエイティブ・ディレクター』<https://www.wwdjapan.com/articles/1498118> (2023年9月15日アクセス)
- 4) 織研新聞 2024「パタゴニア CEO に聞く、なぜ『ファッションじゃない』？ 創業時からの理念 地球救うために逆張り」織研新聞電子版 6月3日付. <https://senken.co.jp/articles/a6672cce-73b2-41f5-bb1a-d1f378af6bde> (2024年6月3日アクセス)
- 5) 本稿は、意味と物質が同一である Things (Henare et al., 2007) を「モノ」、形が明確な物体である Objects を「物質」、物体を構成する Material を「素材」と表記する。
- 6) ファッション研究者である平芳裕子は、「近現代のファッションの歴史とは、才能のあるデザイナーの創造行為、そして彼らが生み出した芸術的作品の記録であるかのよう」(平芳, 2018)と述べ、デザイナー神話や作家、作品主義がなお根深いことを指摘している。
- 7) ボレムスは、エヴァンズ＝プリチャードによるヌアー族の生態学的時間と構造的時間という異なる時間(エヴァンズ＝プリチャード, 1982)を用い、変化を志向せず、それをむしろ伝統の象徴とするイギリス王室の装いを事例にあげ、ファッションとアンチファッションを論じている (Polhemus, 2012)。
- 8) ルバースらは、ファッションを「利益を最大化するために衣服が計画的に新しいものへと入れ替わる大きなプロセスや、現代の産業資本主義の利益追求と切り離せない、そうした慣習の特定の瞬間を表現するもの」と定義している (Luvaas and Eicher, 2019)。この定義は、人類学においても、ファッションが資本主義的なシステムであり、かつ瞬間的なものとして取り扱われてきたことを示している。
- 9) <https://ja.wiktionary.org/wiki/facere> (2025年10月1日アクセス)
- 10) ボーンによる時間性の議論の詳細は、Born (2015)を参照のこと。
- 11) ジェルは、*Art and Agency* (Gell, 1998)において、フッサールの時間意識を引いたマルセル・デシャンとマオリ族の集会所建築の様式的統一性の分析を通して、芸術を論じる枠組みに時間の次元を組み込んだ。

参考文献

- Born, G. (2005) "On Musical Mediation: Ontology, Technology and Creativity", *Twentieth-Century Music*, 2(1), p.7-36.
- Born, G. (2015) "Making time: Temporality, history, and the cultural object", *New Literary History*, 46(3), p.361-386.
- Born, G. and Barry, A. (2018) "Music, Mediation Theories and Actor-Network Theory", *Contemporary Music Review*, 37(5/6), p.443-487.
- Connolly, W. (2011) *A World of Becoming*, Duke University Press.
- Geczy, A. and Karaminas, V. (eds) (2018) *The End of Fashion: Clothing and Dress in the Age of Globalization*, Bloomsbury Publishing.
- Gell, A. (1998) *Art and Agency: An Anthropological Theory*, Clarendon Press.
- Henare, A., Holbraad, M., Wastell, S. (2007) *Thinking through Things: Theorising Artefacts Ethnographically*, Routledge.

- Hennion, A. (2003) "Music and Mediation: Toward a New Sociology of Music", In Clayton, M., Herbert, T., Middleton, R.(eds) *The Cultural Study of Music: A Critical Introduction*, Routledge. p.80-91.
- Hennion, A., trans. Collier, P., Rigaud, M. (2015) *The passion for music: A sociology of mediation*, Routledge.
- Ingold, T. (2010) "Bringing Things to Life: Creative Entanglements in a World of Materials", *Working Paper 15*, University of Southampton, p.1-14.
- Jenss, H. and Hofmann, V. (2019) "Introduction: Fashion and Materiality" In *Fashion and Materiality: Cultural Practices in Global Contexts*, Bloomsbury Publishing, p.1-11.
- Küchler, S. and Miller, D. (2005) *Clothing as material culture*, Berg.
- Lipovetsky, G. (1994) *The empire of fashion: Dressing modern democracy*, Princeton University Press.
- Luvaas, B. and Eicher, J. (2019) *The anthropology of dress and fashion*, Bloomsbury Visual Arts.
- Miller, D. (1998) *Material cultures: Why some things matter*, University of Chicago Press.
- Nagel, A. (2012) *Medieval modern: Art out of time*, Thames & Hudson.
- Parkins, I. (2008) "Building a feminist theory of fashion: Karen barad's agential realism", *Australian Feminist Studies*, 23(58), p.501-515.
- Polhemus, T. (2012) *Fashion & Anti-Fashion: exploring adornment and dress from an anthropological perspective*, (Kindle Edition).
- Rivers, W. (1917) "The government of subject peoples", In Seward, C. (ed) *Science and the nation*, Cambridge University Press. p.306-307.
- Sombart, W. (2001) "The Emergence of Fashion in Stehr", In *Economic Life in the Modern Age*, Taylor & Francis Group, p.191-206.
- Strathern, M. (1988) *The Gender of the Gift: Problems with Women and Problems with Society in Melanesia*, University of California Press.
- Strathern, M. (1990) "Artefacts of history: Events and the interpretation of images", *Culture and History in the Pacific*, 27, p.25-44.
- Woodward, S. and Fisher, T. (2014) "Fashioning through materials: Material culture, materiality and processes of materialization", *Critical Studies in Fashion & Beauty* 5(1), p.3-22.
- 井高久美子 (2023) 「幻の絹糸 セヴェンヌ」原瑠璃彦編『More than Textile 3』細尾. p.8-35.
- インゴルド, T., 柴田崇, 野中哲士, 佐古仁志訳 (2021) 『生きていること：動く、知る、記述する』左右社.
- エヴァンズ＝プリチャード, E., 向井元子訳 (1982) 『ヌアー族の宗教』岩波書店.
- エントウィスル, J., 鈴木信雄監訳 (2005) 『ファッションと身体』日本経済評論社.
- エントウィスル, J., 山内朋樹訳 (2018) 「ブルーノ・ラトゥール：アクターネットワークセオリーとファッション」 藤田裕史監訳『ファッションと哲学』フィルムアート社. p.414-437.
- 小野瀬慶子 (2023) 『フィッティングルーム——＜わたし＞とファッションの社会的世界』アダチプレス.
- 春日直樹 (2011) 「人類学の静かな革命——いわゆる存在論的転換」春日直樹編『現実批判の人類学——新世代のエスノグラフィへ』世界思想社. p.9-31.
- 工藤雅人 (2021) 「ファッション研究」の研究動向『日本家政学会誌』72(3), p.172-179.
- 佐本英規 (2021) 『森の中のレコーディング・スタジオ：混淆する民族音楽と周縁からのグローバリゼーション』昭和堂.
- ジエック, S., 山本耕一訳 (2012) 『終焉の時代に生きる』国文社.
- スモール, C., 野澤豊一訳 (2011) 『ミュージッキング：音楽は＜行為＞である』水声社.
- ダントー, A., 河合大介訳 (2017) 『芸術の終焉のあと：現代芸術と歴史の境界』三元社.
- ハーヴェイ, D., 大屋定晴監訳 (2019) 『経済的理性の狂気——グローバル経済の行方を＜資本論＞で読み解く』作品社.
- バラッド, K., 水田博子, 南菜緒子, 南晃記 (2023) 『宇宙の途上で出会う：量子物理学からみる物質と意味のもつれ』人文書院.
- 平芳裕子 (2018) 『まなざしの装置：ファッションと近代アメリカ』青土社.
- ボードリヤール, J., 竹原あき子訳 (1984) 『シミュラクルとシミュレーション』法政大学出版局.
- メリアム, A., 藤井知明, 鈴木道子訳 (1980) 『音楽人類学』音楽之友社.
- 森田敦郎 (2011) 「モノと潜在性：タルド的視点に基づく機械の民族誌の試み」『文化人類学』76(1), p.33-52.
- ラトゥール, B., 川崎勝, 平川秀幸訳 (2007) 『科学論の実在：パン

ドラの希望』産業図書．
ラトゥール，B., 川村久美子訳 (2008)『虚構の「近代」：科学人類学は警告する』新評論．
ラトゥール，B., 伊藤嘉高訳 (2019)『社会的なものを組み直す——アクターネットワーク理論入門』法政大学出版局．
鷺田清一 (1998)『ひとはなぜ服を着るのか』日本放送出版協会．

[受付日 2025. 11. 15]
[採録日 2026. 4. 3]

